金三百圓被下候旨宮内大臣ヨリ達セラレタリ

明治二十二年八月廿六日　　熊本縣知事富岡敬明

熊本新聞は翌廿七日の紙上に記載して曰く本縣下大地震に就ては　聖上よりは早速富小路侍從狄非職侍從を差遣され實況を視察せしめ給ひしか兩氏の歸京のうへ奏聞を　聞召さるしにより罹災者　御救恤の　思召を以て金千圓また　皇后陛下より金三百圓を下賜ある旨宮内大臣より本縣知事へ達せられしに付昨二十六日第六十五號紙以て告示せらる即ち同日號外を發行せり　聖恩の渥き民之れか爲めに感泣すと云ふ

萬乘の君かく恤ませ給ふことなれは同胞人民為るものまた窮を救はさるへからす熊本市及ひ近傍郡村の人民は何れも多少の損害ありて他を救ふの遑なふさるへしされと餘地なき中より救ふこそ眞の義損なふすや況や震災劇けしのらさる土地の人に於てをや

飽田郡大塘にたひて本日の震動を驗測せられし報告は左のごとき

第九報告

八月廿六日午前四時十八分五十五秒輕震(ゆり地は主として南北に六毛動けり四秒にして靜止す人の感覺に觸る)同四時二十八分十九秒微震(同五時三十分十五秒微震)同六時十分四十四秒微震(六時二十五分十五秒微震)午後零時三十二分十秒微震(同二時二十七分二十四秒微震(未完)

縣廳にて本日の震動を調査ありしは左の如し

輕震　一　　鳴動　二　　合計　三

○八月廿七日晴　　正午寒暖計八十六度　　舊八月二日

本縣下に於て七月二十八日の夜の大地震及ひ八月三日午前の劇震に付被害に罹りし人命家屋其他地裂壞崩等は八月五日迄に本縣廳にて調査を了へられし明細表を揭け置しか昨二十六日本縣告示により熊本市街及ひ各郡被害の再調査を遂げらるゝに決

し市内實地取調へとして本日巡視されしは縣廳よりは松村熊本市警察署より堀警部補市役所より松崎助役參事會員より伊喜見文吾氏を擔任として其外若林庶務課長を初め官吏兩三名立會にて夫々取調へらるし家數は凡五十七八軒其内全潰半潰死亡者負傷者とも一々精細に調査ありしか間には破屋の屋根洩れ又たは負傷の調査等をありて少しは以前調査の分と齟齬せしもありしと云ふ

飽田郡大塘にて驗測ありし第九報告の中にて本日の震動を掲くれは左のごとし

第九報告(續き)

八月廿七日午後六時五分二十一秒微震●同三時三十二分三十二秒微震人の感覺に觸る

縣廳にて本日午前零時より午後十二時はて調査ありし震鳴動の數は左のごとし

輕震　一　鳴動　三　合計　四

○八月廿八日晴　正午寒暖計八十六度　舊八月三日

昨日の記事欄に掲けし熊本市内罹災の調査を結了せられこれを以て各郡罹災調査の標準とするに議決し本日縣廳より託厩上下益城の三郡へ内藤屬飽田郡へ中尾屬山鹿山本玉名の三郡へ井上屬出張を命せられ各郡役所臨時震災掛の書記及ひ各村の村長村會議員巡査立會の上各罹災の人命家屋等の分は實地精細に調査せらるると云ふ

飽田郡大塘にて震動を驗測せられし第九報告中本日の分は左のごとし

第九報告(續き)

八月廿八日午前一時三十九分三十秒微震●同午後六時二十五分三十六秒微震●同十時四十九分二十六秒微震四秒間繼續人の感覺に觸る

以上掲くるは悉皆細微の地震のみなり前報告にも述へしまとく地震計に圓筒面に地動を示す處の波線を生せしむる裝置なるも地動微にして波線を顯はすに至らす殊に此報告中圖面を附せさるものは器械に感したるも人の知らさりし微震なり仍は廿九日は大塘へ裝置なる器械を解き本縣廳構内へ移送するを以て驗測する能は

さりき

縣廳にて本日震動を調査されしは左のごとし

輕震　一　　鳴動　五　　合計　六

○八月廿九日晴　　正午寒暖計八十八度　　舊八月四日

先日來縣廳内南手の空地凡拾坪はかり地形を撫ふし驗震器等据へ付の準備ありしか本日飽田郡城山村大字大塘に据へ付ありし驗震の諸器械を解き縣廳へ運搬し直ちに据へ付にとり懸ふれたり依て第九報告の末文にあるごとく本日より地震の驗測は止められたり

縣廳にて本日午前零時より午後十二時迄て調査せられし震鳴動の數は左のごとし

輕震　二　　鳴動　二　　合計　四

○八月三十日晴　　正午寒暖計八十九度　　舊八月五日

縣會常置委員及ひ四新聞社か發起となり震水の被害者救助の義捐金募集は本月三十一日締切の筈なりしも各地の有志家續々申込えられは別段の協議を遂られ本月十五日迄締切を延期すへしと議決せられたり

關谷教授か地震驗測として携帶せられし諸器械は昨二十九日飽田郡城山村の据へ付を解き縣廳へ運搬せられしことは前日の記事に掲けたりしか同日略ぼ据付あり本日は午前七時より他の器械据付の爲め室内騷々しく午後一時迄驗測する能はさ一時以後驗測されしもの左の如しと云

午後一時五十一分八秒微震●仝六時五十二分廿六秒仝●午後七時零秒より仝十二時迄驗測に觸るゝ震動なし

縣廳にて本日午前零時より同十二時迄別に調査ありし震鳴數は左のごとし

鳴動　一　　合計　一

又た縣廳にては構内に器械を据付られしを以て宿直及震災係の別調査は本日午前に止められる

○八月三十一日曇　　正午寒暖計八十五度　　舊八月六日

縣廳構内に据付られし關谷教授携帶の地震驗測器械本日の驗測は左の如し

八月三十一日午前十時四十七分四十二秒微震●午後四時十六分鳴動●仝四時三十五分仝●仝八時十五分三秒仝

熊本新聞は九月一日發の長崎通信を掲けて曰く小藤博士は八月三十一日三角港より漁船にて來崎し江戸町鶴屋方に投宿即日長崎測候所に至り七月以來の氣象等を取調へ九月一日より佐賀久留米地方に到り地震の實蹟且つ將來の兆候を見て歸京する筈なりと云へり云々

七月二十八日一大劇震を發せし以來日々强弱の震動歇むことなく延ひて八月に至れり依て日〻記事におひて縣廳の調査ありし震鳴動の回數は掲けたれとも今爰に初震即ち七月二十八日の夜より八月盡日に至る三十五日間の震鳴動數を掲けて以て看者の便に供す

七月二十八日午後十一時三十五分(或は云ふ四十分)初震より同二十九日午前十二時に至るまての震動數は明瞭ならす依て同日午後零時より八月三十日正午迄の回數を示すこと左表のごとし(七月二十八日より八月二十一日迄縣廳にて調査の總計は各新聞に掲けあるを以て今これを採りて以て繁文を省く看者これを領せよ

	劇震	稍强震	輕震	鳴動	合計
從七月廿八日至八月廿一日	二	三九	一二九	一四四	三一四
八月廿二日			一	二	三
八月廿三日			二	四	六
八月廿四日		二	二	三	七
八月廿五日			二	二	四
八月廿六日			一	二	三
八月廿七日			一	三	四

八月廿八日					
八月廿九日			二	二	四
八月三十日			二	一	三
八月卅一日			一	三	四
合計	二	四一	一四四	一七一	三五八

因に云迂叟震災日記の稿草するや時恰も秋季の初旬に在りて宿痾に苦しを惱むこと日としてあらざるはなしまの故に荏苒日を延して九月の末つかたに至るされとも地の震動するや尙は今に歇ほす日々鳴震の回數はくだ〳〵しけれは爰に記さすとゝへとも一二回稍々強き震動を感せしにより縣廳内にて驗測ありしものを左に掲けて覽者の參考に供す

熊本新聞は九月十日の發兌の紙上に左の記事を掲げたり

地震も近頃はまた〳〵氣の利たやうにて去る七日の夜十一時十五分の震動は頗る長く且つ強かりき昨九日の曉四時頃もまた眠りを覺す位ひの地震ありき市民も大に地震に馴れて來たとはいひながらも何とか氣味の宜さそうにはなきがごとき摸樣あり云々

縣廳内驗測所の報告は左のごとし(微動は略す)

九月五日午前一時三分三十九秒に發したる輕震は横動即ち地の横に動きたる時間は二十六秒時間にして靜止し方向は主として東西なりき又微弱の上下動を呈せり

同七日午後十一時二十四分四十五秒に發したる輕震は性質は急速にして上下動相混して起り横動即ち地の横に動きたる時間は二十六秒にして靜止す其最大なる時は一分(曲尺)なり方向は主として東南なり又上下動即ち地の竪に動きさる時間は十一秒にして靜止し其の最大なる時は二厘(曲尺)なりき

同九日午前四時十三分十秒に發したる輕震は波線の細微なるを以てあれを測ること能はさりき

熊本新聞は九月十五日發兌の紙上に記載したること左のごとし

昨十四日は七月二十八日初震より七々四十九日目に當るを以て或ひは地の動搖はせぬかなと例の浮説かちらほらと浮ひ廻る矢先に午前六時五十五分の震動は稍々強きを覺へ同七時三十五分と兩度の震動ありし故市民の内にはいくらか警戒をなせしものありしと云ふ

斯て十九日頃より廿四日に至る五六日間は日々二回乃至三回人々の感覺に觸るゝ震動ありて何となく人心も安からぬ思ひをなしぬ九月廿六日の夜は此頃の雨催しにて一天かき曇り綾目もとかぬ程なりしか初夜より南の方に方りて大空を翔ける鳥の聲喧しく皆人々は千鳥の鳴聲なりと云へりこれに就きて例の浮説流言また起り稍々人心をして堵に安せさるの思ひあらしめしと云へり熊本新聞も此ことを記して左のごとく掲けたり

風聲鶴唳にも肝膽を寒くするは恐懼ある身の常として昨夜は時節柄とて飛翔る數多の鳥の空中に飛鳴するあとは毎年あることなれは驚くあとにはあらされとも恐怖を懷ける身には何事かあるならんと長六橋邊に集ひし人々は隨分夥かりし由なるか通町邊にても鳥の夜鳴して飛翔するはたゞ事ならじ下等動物は能く物を前知するとかや今夜地震の前兆にはあらさるか金峰山破裂するの知らせにはあらさるかなと千々に思を廻らし徹夜の覺悟にてカルタ抔を弄して夜半過まても眠らさりし家々も間々ありしと云ふ

されぬ等の浮説は一笑柄に附し去るあとなれと後世の參考にもと序てに筆を染めぬ

熊本市内の地裂及ひ噴水砂の箇所々々は初めにくわしく記し置たとれも今市街略圖を左に掲けて其位置を示す圖面中符號を印する左のごとし

地裂

●　噴水砂

○　井戸溢れ及ひ涸水

但し此符號は赤色を以て印す

○地裂噴水砂の詳記

七月二十八日の夜の劇震にて熊本市街地裂及ひ噴水噴砂の箇所は當時の記事に詳細掲け加ふるに同市街の全圖に朱線を施し以て其地位の一班を示すとゝへとも今熊本市役所にて調査せし書類により前記の重複を厭はす爰に掲けて圖面の説明に換ふ

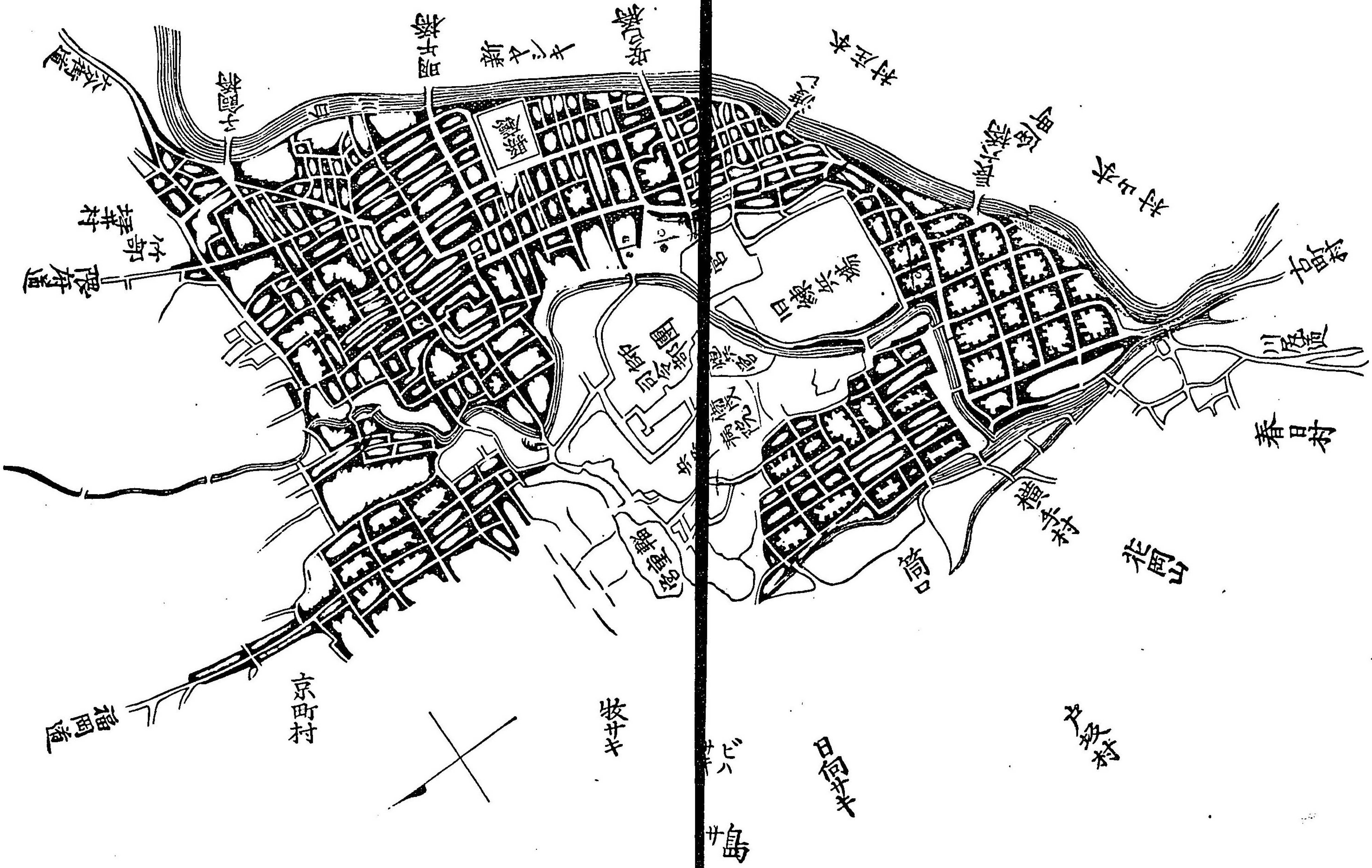
熊本高等小學校敷地内西側私立病院界際に長五間内外にして四箇所裂け水及ひ微砂を噴出す監獄地内精米場にて二箇所水及ひ土砂を噴出し同所の井戸の水震動後即ち十二時頃に至り俄然溢れ出て井筒を超へ暫時流出す

廐橋々臺の路面前後裂けたる形蹟凡長三間餘見へたり

手取本町通監獄西側坪井川沿ひの道路延長二十間餘裂け幅廣き所二寸深さ詳かならす

追廻田畑邊監獄南手道路横斷して裂け延長九間餘幅八歩餘同所二十三聯隊裏門前より三ヶ所裂け水及ひ土砂を噴出す

下通町三年坂巡査派出所裏手追廻田畑通道路横斷三線に裂け何れも同所にて幅一



京町村
福岡道
春日村
花岡山

寸以上二寸程深さ詳かならす南北に延長して北は下通町筋細流舍の近傍にて形蹟見へす南は形蹟明著ならすといへとも隱顯出沒一線となり或は數線となりて南に向ふ其中にて下通二町目百十四番地吉野万作方の井戸水溢れて井筒より超たりと云綻裂は三町目より新鍛冶屋町裏手を通り夫より鑑匠町高木第四郎田尻万平の宅地を經て再ひ新鍛冶屋町村井雲臺宅地上手にて一線となり同町道路を横斷し東側二三軒の家屋の下を經て又た同町の道路に出て二線となり一は道路の中央にて形蹟を見す一線は西側岡本文吉の宅地を經隣家山野忠藏の宅地より裏手養蠶院境内墓地を通り三線を現し幼稚園の界に至り形蹟を絶つ

下通町一二町目家屋下にまた一線の裂地あり（前項に云へる數線の一なるへし）一町目鈴木嘉三郎方床下に噴水し二町目塚本卯吉方も同樣なりしか該家の噴水は餘程多量なりしと云ふ尤も兩家とも宅地は暫時水浸りにて手足を觸るれは大ひに寒冽を覺へ為りと云へり同町の中央に弧狀に裂け多量の噴水ありて暫時は路上凡壹尺五寸以上に噴騰せりと云

新鍛冶屋町地内白川堤防護岸上馬蹈に延長五十間餘一直線に裂け幅廣き處は壹寸五歩に及ひしも中央僅かにして前後は只裂けたる形蹟を見るのミ

山崎町筋木村萬作宅地裏門内に南北に向つて二線の裂けあり此所も水及ひ土砂を

噴出す同町六十五番地内に二箇所源覺寺町にて深水繼雄宅地に三箇所同じく水及ひ土砂を噴出す同町に二線乃裂地を現はし源覺寺境内にも噴水二箇所井戸の水は溢出して土砂を吹上け遂に井中を充塞す同寺の裏手より洗馬町三丁目に延き同所岡崎卯太郎宅地に二ヶ所噴水して該家の内土間は水浸となれり近傍の井戸二箇は水溢れ出てたり源覺寺町及ひ洗馬町とも噴水最も多量なりしと云洗馬町道路の中央凡そ四坪程陷沒す(舊埋樋乃際と云)同所に一線の裂地を顯はし横斷して裏手拾間餘にして古鍛冶屋町吉田万喜宅地裏の石垣壞崩の處に至り其形蹟を失ふ中唐八町九番地松本武平宅地際より一線の裂けありて同町を横斷し向側に至り形蹟を失ふ

洗馬上壹町目道路に裂地一線を畫し長さ拾五間餘にして空隙なくたゝ裂けたる形蹟を殘すのみ

古城堀端町活版舍北側長さ五拾間餘裂けあり幅一寸乃至二寸程にして行人危險の虞あり

宮内町新坂東方より西に向ひ長さ三間餘また西南より東北に長さ三間餘裂けまた該坂中央長さ四間餘の裂あり庚申橋際寺原町地内大工町より榎町に懸け二線の弧形に裂けあり

石塘道路南北の左右に二線の裂けあり其他中央に長さ一間以上五間以内の數線を畫す新橋々臺前後に三線の裂けあり坪井川に沿ひたる處に長三間程幅三寸以上深さ詳かならす其外裂けたる形蹟數線あり延長する時は凡百二十間餘に及ふ

細工五丁目裏手より川端町裏堤防延長五十間程裂けたる形蹟あり

右之外小幡町一夜塘上裂けありて全塘にれよひまる山町東裏に長七十五間弧形の裂地を發見せり

坪井廣町本願寺說教所の角に一線の裂地を存せり

八月廿六日本縣告示第六十五號を以て達せられたる御救恤の　思召を以て金千圓又た　皇后陛下より金三百圓下賜ありたるにより同月廿七日の記事に掲けしあとく熊本市及び飽田郡外七郡に於て再調査せられし成蹟を上申ありしにより本縣知事には市郡役所に命令して九月廿二日夫〻頒布せられたり右に就き熊本新聞は左のことく記載せり

今般縣下震災の事早くゝ聞食され　兩陛下より震災者御救恤の爲金千三百圓を下し賜はりしとは吾人臣民たるものゝ感泣せし處なるか本日は熊本市役所に市内の

罹災者及ひ其の遺族一同を召喚せられ杉村市長は縣廳よりの訓旨を讀み聞かし先且つ天恩の優渥なるを懇篤說き示して死亡者五人の遺族へ六圓宛一等負傷者五人へ三圓宛二等負傷者六人へ一圓五拾錢宛倒家六戸の戸主へ四圓五拾錢宛半倒家四十五戸の戸主へ四圓十錢宛夫々恩賜金を分與せられしにより皆感涙を拭ひ　聖恩の忝けなきを拜謝して退出せりと云ふ云々

右恩賜を蒙りたる熊本市内死亡者負傷者及全倒家半倒家の町名職業姓名を擧れは左のごとし

死亡五人

西外坪井町四十一番地	平民雜業	三河彌平次	三十八年十一月
中坪井町三十六番地	平民雜業	二尾嘉藏母 二尾フサ	六十年四月
古城堀端町假居	平民無職業	河北次平	四十三年
段山町五十番地	平民商	内田繁次郎養母 内田サダ	七十三年六月

新馬借町　平民無職業　三橋健太郎長男 三橋初次　十年

一等負傷五人

西坪井町六十二番地	平民雇人	有吉善海下婢 藤本チモ	四十一年
新屋敷町	仝　雇人	大室歩兵少佐馬丁 唐木豊吉	三十五年
呉服壹丁目十六番地	仝　雜業	濱里己之八	十五年
新壹丁目五十四番地	仝　雇人	渡邊敬右衛門手代 秋月豊吉	十六年
新壹丁目百四番地	仝　商	清泉初次郎	四十三年

二等負傷六人

小澤町四十番地	平民商	荒木ツイ	六十年
魚屋三丁目九番地	仝　雜業	竹中伴吉長女 竹中エツ	二十二年
新壹丁目百四番地	仝　無職業	清泉初次郎二女 清泉スエ	七年
新堀町四十一番地	仝　商	西村忠八妻 西村チト	四十年

西坪井町六十二番地	平民僧侶	有吉善海妻 有吉マシ	三十八年
西坪井町百番地	仝　商	水谷善八	六十五年

倒家六戸

古城堀端町四番地	平民商	松尾ヒロ
西坪井町六十二番地	仝　僧	有吉善海
西外坪井町百番地	仝　商	水谷善八
中坪井町三十六番地	仝　工	二尾仁太郎
仝町三十三番地	仝　商	木村内蔵八
新壹丁目百四番地	仝　仝	町並佐一郎

半倒四十五戸

細工四丁目三十五番地	平民商	茂永儀三郎
仝五丁目三十三番地	仝　仝	米村龜次郎
仝二丁目二十一番地	仝　仝	福田壽作
仝四丁目三十九番地	仝　仝	田村運八
川端町十三番地	仝　仝	田邊市平

下職人町二十九番地	仝　仝	橋本直八
新一丁目百五番地	仝　仝	高木惠一郎
新一丁目百三番地	士族無職業	布　重藏
新桶屋町二十九番地	平民紺屋職	岩吉次三郎
新馬借町十七番地	平民商	尾田卯藏
仝町十八番地	仝　仝	岩瀬嘉次郎
新魚屋町三十九番地	仝　仝	本田仙太郎
蔚山町八十三番地	仝　仝	加納勘七
高麗門町二十番地	仝　雜業	中村熊八
古城堀端町二番地	仝　仕立職	藤森仙次郎
中坪井町十四番地	仝　商	牧野利平
仝二十番地	仝　仝	前田壽作
仝十番地	仝　仝	工藤休太郎
仝八十五番地	士族無職業	田中果壽
仝三十八番地	平民織機職	八田久七
北坪井町六番地	士族無職業	片山儀一角

北坪井町二十五番地	士族無職業	梅野惟一郎
西外坪井町七十五番地	平民商	金輪德太郎
東外坪井町百四十九番地	仝 仝	馬場大作
寺原町七十二番地	仝 仝	廣瀬善作
仝百四十七番地	巡査	山内幾四郎
東寺原町六十六番地	平民農	緒方忠次郎
仝九十六番地	仝 雜業	三島清作
仝三十七番地	巡査	工藤弘士
北千反畑町四十一番地	仝 商	鎌倉政平
新堀町十一番地	仝 仝	角田卯三郎
京一丁目九十一番地	士族商	境 兎一郎
出京町百一番地	平民仝	橋本勘七
仝百二番地	仝 仝	永弘彦次郎
仝十八番地	士族仝	松永平記
仝九十八番地	平民仝	櫻井庄八
仝十七番地	仝 仝	平川茂三郎

仝八十七番地	仝 仝	津崎才次郎
仝三十七番地	仝 仝	清藤松平
仝七番地	仝 仝	笹涙儀一
仝百二十一番地	仝 仝	石原仙藏
仝百二十二番地	仝 仝	眞津重藏
仝百三十七番地	仝 仝	佐野次三郎
仝百三十九番地	平民鍛冶	江口太平
仝百六十七番地	仝商	有尾熊三郎

右の外熊本市内に於て全倒四戸半倒八戸餘あれとも之れ等は扣屋及ひ貸屋にして持主自身の住家にあらす内一戸は判任官吏なれは御救恤金頒布の數には省かれたりと云迂叟仄かに聞く今回再調査せらるゝや負傷の爲兎に自營の業を執るあと能はす倒家のごときは罹災人民か自身の住家を失ひ或ひは毀損し一時生活の業を營み難きものを標準とし扣屋或ひは貸屋あとを失ふも我住家の依然として存在するその或は判任以上の官吏又たは所得税を納むるものは御救恤を仰くの限にあらすと議決されし

由に承りぬさてこう前に云へる扣屋貸屋のごときは今回賜金頒布に洩れたるなるへしその外土藏炊場物置の類ひ又は本家の一部分即ち下家大垂雪隠板塀を倒し若くは毀損せしもの其數夥多あれとも皆戸主一家族の住家にあらさるものは悉く省かれたりと云（飽田郡外七郡罹災御救恤の調査ありしは皆熊本市内に準據せられし由なれは別にこれを記さす）

飽田郡外七郡において罹災者即ち死亡者負傷者全倒れ半倒れのものへは熊本市同樣同日に御救恤金下附ありしに付住所氏名職業とも詳細の調へあれとも冗長に亘るにより氏名等は熊本市に止め不本意ながら省略してたゞ人員のみを記すこと左表のごとし（熊本市は再記す）

震災被害者へ恩賜金配付表

郡市名＼種別	死亡	一等負傷	二等負傷	全倒	半倒
熊本市	五	五	六	六	四五
飽田郡	一六	一六	二三	六〇	八五
託麻郡			三	五	六
宇土郡				一	
上益城郡			一	八	六
下益城郡				一	四
玉名郡			一	七	六
山鹿郡				一	三
山本郡			一	三	
計	二二	二二	三六	九二	一五五
一人一戸ノ金額	六圓	三圓	一圓六十錢	四圓五十錢	四圓十錢
合計金	百二十六圓	六十六圓	五十七圓六十錢	四百十四圓	六百三十五圓五十錢

迂叟竊かに聞く今回御下賜ゑ相成し御救恤金は千三百圓にして前表のごとく一人一戸の金額を定め總人員に頒布せらるゝ時は總計金千貳百九拾九圓拾錢となる此剩餘金九拾錢あり今や幸にして縣會常置委員及ひ四新聞社が發起人となり水災震災に罹りし同胞を救恤せんとて義捐金を募集し來りしか四方有志の人々其募りに應し續々義捐の申込あるとてはや數百圓に及へりと故に該剩餘金のことさも此金額に加へられて再度の頒布に充ふるゝよしに承わりぬ

明治震災日記逸事

○各新聞七月卅日の發行の紙上に掲けて云ふ第六師團軍醫部よりは此節の遭難救護の必要あらは若干の軍醫を派出せしむるも差支なしと本縣廳へ照會されしと聞く云々熊本に設立せる基督教の三教會には二十八日の大震の後此上にも非常の變事ありて衆民如何なる災害を蒙むり而して救護其の人なく困難の末遂に夭亡等の不幸に至るも知るへからす斯る憫然なる人々の爲め臨時救護病院を託麻郡九品寺村熊本英學校附屬女學校に設立せんと協議を決し縣廳へも其趣きを屆け各郡へも報知せしかは該教徒は遠近を問はず一同贊成するのみならす葦北郡田浦の開業醫泉田謙太郎氏は臨時手當金若干を懷にし八月七日に到着し球磨郡深田村の醫士田中玄哉氏も緊要の器械藥品を提携して同九日に着熊せりしかのごとならす熊本英學校教師ギュリーキ氏及ひクラーク孃は當時京都比叡山に避暑中此報を聞くや該地に於て募られし義捐金を携へ態々出立して八月十五日の夕刻歸熊せられたり就ては各縣の教會も追々と義捐を投與ありけれとも幸にして該救護病院設立の必要なきの景況となりしかは勇ゑ立ちし人々も一ト先歸鄉されしと云ふ　（熊本新聞）

市内迎町三十九番地醫師渡邊龍吉氏は今回震災の爲め急症傷痍に罹り其他百般の

患者を治療し貧者は治術料藥價をも要求せられさる由　（海西日報）

○

在東京の米田虎雄氏は震災の電報により舊下屋敷に居住の舊臣諸氏の罹災を救助せんとて金百五十圓を支出すへしと申越れたれは留守居の會計方へ八月四日に夫々配當せし由　（九州日々新聞）

市内古桶屋町壹谷地精米商家村龜次郎（海西日報には家村卯七とあり）は町内震災に罹り困難のものへ八月六日白米三俵を其人々に應し施與せしと云ふ　（熊本新聞）

八月十日市内段山町字木下町の高崖潰崩し人を壓殺し家を潰したる際該憑りの消防組は非常の盡力ありて夜を厭わす掘出せしを見て洗馬橋西詰文林堂主人當時の市會議員丹邊総次郎氏は慰勞の爲め酒若干を送りし由　（全新聞）

○

山鹿町有志者の設立に係る馬車會社の往復馬車は震災後力人荷車駄馬等の賃錢非常

に騰貴せしにも抱らす普通の賃錢にて往復するにより一般人民は大きに其便を得たり同會社のごとき規則嚴正漫りに賃錢を低下せさる代りに斯る場合に臨むも更にまた賃金を高むることなく實に會社信用を重んするの結果と皆人々云ひ合へり云々

（熊本新聞）

今回の劇震に就き避難の人々か遠近より遁け走るを好機とし車夫連は不當の賃錢を貪るもの多かりしに市内七軒町荷車挽業白井政次白井鶴藏白井某の三人はかゝる非常に際し不正の所業を爲すは我良心に恥るとて三人とも平素の車賃にて働きしかは心あるものは大きにその殊勝を感せしも同業仲間よりは一時仇敵視されたりと云ふ

（日々新聞）

託麻郡春竹村米商松岡常次郎は前項に述るがごとく車賃の騰貴して人々の迷惑を釀すを氣の毒に思ひ自家の雇人共に所持の荷車を挽かしめ古町新町邊の知音の荷物は無賃にて運搬の助力せしかは孰も其壯年に似合ぬ奇特の人なりと感したりと云ふま

た同所の紺屋職松島嘉三郎は大地震にて暫時家業を休みしを幸ひ染物干場七十餘坪に大小數箇の假屋をしつらひ熊本市内知音の避難所に充るのゑならず三度の食事も自ら炊出して振舞しかは皆人は其義俠に感心せりと云（仝）

○

市内新屋敷町百六十二番地古閑直行氏は家内五人の外に同居せる叔母親子都合七人なるか七月二十八日の夜の大地震に皆々飛ひ起き外面に逃け出てしか幼弟二人（八年と四年）ゥ見へさるより母は慌き慌て家の中に駈入しと同時に家はめり〳〵と倒れたり直行はいまた幼若なり同居の某か一人にて臥房の上を取除にかゝりしもくらさはくらし矮少の家屋とはいへ中々一人の力に及ふ處にあらす恰もよし隣家なる河口虎雄氏か提灯を携へ二階を見繕ふ折節助けを呼ぶ聲に驚き其儘二階より外面に飛ひ降り駈け付けて共に助力し漸つと屋根を取除け見れは母は二人の幼兒を兩腋に啟と抱へ立ち上らんとする時梁や柱に壓れ俯向きに臥しゐるか幸ひにも僅かの木材に

柱を支へ三人とも命に別條なかりしは實に高運の人々なすらや

七月二十三日瀬戸坂の高崖壞崩の時全家を壓せられし亡藤嶋健作の家族は都合八人にして父母並に兄兩人（他家を繼きて同居す）及ひ一人の弟二人の妹なりしか父藤嶋定兄安田仁太郎妹某（十三）及ひ戸主の健作は壓死し殘れるは母藤島マスと病身の兄門岡市太郎と幼兒の弟妹なりか罹災の後は一旦近傍の家を便り一兩日を送りしも斯てあるへくもあらされは中坪井町にて某の所有なる古土藏のあるを借受け所々より惠まれ或ひは借用したる鍋釜茶碗など一荷にも足らぬ品々を携へ引移りたるは即ち七月二十八日のあとなりき神ならぬ身の其夜の大地震にて安らかに寢たる土藏は一搖りに梁木落ち柱倒れて臥したるまゝ又もや壁の落土に埋まれしか母子僅かに微傷を負ひ四人とも通れ出しは天幸とや云ふへき今回の劇震には誰れも彼れも災害を受けしには替りなけれと月に兩度否一週間に兩度未曾有の災殃に遭遇するとは實に愍然の人々ならずや（海西日報）

山鹿郡來民町千六百二十五番地平民工藤亥之八妻シキ(三十三)長女ハツ(十)二女キク(七)佐藤サト(三十二)の四人は七月二十八日の夜同家にて共に寢所に在りしか彼の大地震にて不斗目を覺せは無慙や家は倒れて四人なから其の下に壓伏され居たり然るに幸にも倒さし柱折れたる梁は簞笥と土間に積さありし俵物に支へられて爲めに壓死を免かれたりしを近隣の人々駈け付て屋根を取除くおとして辛らくも四人なから命を助かりしと云　(仝)

○

二十八日の夜の震動は事急卒に出し爲め誰れ人も直ちに遽てしまゝ家屋を飛ひ出しか間には提灯蠟燭の用意もなく殆と當惑せし折柄一商人ありて高聲に蠟燭を賣歩行しは時にとりて避難者のため大ひなる便利を與へ其身も頗る懷中を温ためしなふんあれそ機敏の商人と云ふへし　(日々新聞)

前項に述ることき地は日夜に震動し夜々仮小屋に露臥する折柄指し向き需用の急なるは油蠟燭なるか市内古町の或る大家の蠟燭屋は恐慌の際とはいひなから兼て店頭山のことき蠟燭を周章てゝ荷造りし他に運搬し去りたる故兼て多くの顧客に頗る迷惑させしのミか其家にても可惜金を儲け損なひたりと云これ等大家にも似す自から利することを知らされは他人に益することは尚ゝ知らさるものありと皆人評しあへりと聞けり　(熊本新聞)

七月三日四日頃には市中大恐慌を發起し荷擔車載四方に散乱するに當り古町の或る一商人某ゆり上益城郡甲佐町(熊本より六里)へ荷車を雇ひしに片道の賃金六圓を下されと云ふ某か考ふるに車壹臺の荷物を大坂へ送る時は平素二圓五十錢なれは取戻しに一兩日の日子は費やせとも甲佐町へ送るはかりの入費にて大坂往返の船賃を償なふて尚ゝ壹圓を剩すのミならす荷物も頗る安全なりとて多くの荷物を大坂へ送りたりと云實に敏捷なる商業家なるかな　(仝)

此度の地震は西山破裂の豫兆ならんと云ふより市内の人心怖れ立ち皆逃け支度を爲

すの際坪井六間町の呉服店田代屋のごときは第一番に店を閉ち在村へ落行しかは彼の大家〻へ逃げ出したるそれ〳〵も遁けそるを得すと俄かに狼狽して諸方に避け行しもの多かりし由なるか何故に田代屋ごとき大家か人に先立ちて遁出せしか要てとゐら見と疑ひて竊に聞けは狼狽せしに非す恐怖せしにあらす目下舊盆會前にて熊本の地震の變ありては在々町々の人々も怖れて出るものもなく商賣も甚た不景氣ならんと察し此際斷然店を鎖して各郡に出張し商業を營まんと偖こそ數多の番頭小僧を手分々して各所に出張せ志めしなりと云ふ其の機敏のほと感に堪へす云々（日々新聞）

迂叟此稿を寫すに及ひ座に居合せし或る商業家かこのあとを難して曰く田代屋か恐懼の余り狼狽周章して忽忙熊本を後ろにし遁出たせしを機敏なりと賞讃されしは流石に士族先生の手になれる新聞にして商業に迂遠なるを顯はされたり如何となれは昔よゝ世話に云ふ町人は躓き倒れても糞ても掴んて起ると田代屋のごならす古町新

町の大家か皆悉〳〵人々に先んして恐懼せしものから利益を取るよりも怖さか前立ち居るに居られす狐鼠〳〵と遁支度にかゝり翌日にもなれは狐鼠〳〵位ては追つ付そ公然と恥も謗りも顧こるに暇あらされともそこか流石に商業家かゝる恐慌の其中にも遁るならは盆前なり在町て商ひせよとさてこそ始の恐懼と云文字に慾と云へる文字か立並んて現われ機敏と云れるほとのあとか人に見らるゝそのなりあは田代屋一人にあらす皆商業家の持前なり或る商業に名を得たる某のごときは店の賣品を車二三臺に積み或る在町の豪家に預くるに臨ま跡にて禮金などの損失を為さんよりはと直ちに歩質の談判に及ひ若干の借り金を引摺ひて賣品の仕入元に駈け行跡荷の手付を入れたる人さへあるをや今回のあとときは大家は大家たけ〻す〳〵浮説流言に惑わされ矢鱈無性に怖かりて周章せしものか恐れ戰きしことくには西山もそふ容易く破裂もせす去りとて人にも知られし大家か今更熊本に阿容〳〵と入るも面はもけなれはとて首を左右に捻りて漸つと考へ付たる所謂云ひ譯の機敏なるをやそれを仰々し

く賞讃のみか感するに堪へたりとまて掲けあるは餘り過賞の事ならすやと迂叟默然
答ふる言葉を知らす其說の當否はさし置き聞かまゝを記して爰に附することゝはな
しぬ

○

家仆れ人死亡せしまとは思ひの外少なけれとも二十八日の夜より本日まて十日間市
民は唯死地を蹈たる心地あるのみなりしを以て固より稼業を勉强するものもなく
大概店を鎖し全街の大半を擧けて立退きたるより市内寂寥となり爲めに旅客も來ら
す諸商品も入込むの途を絕ち偶々稼業に從事せんと欲する勞役者も雇傭ものなく空
しく手を束ねて遊惰なと彼れに引けあれに就き今回の震災より生したる間接の損害
は實に非常のことなるへし或る實際家の話に據れは震災に關し全市街か蒙りし一切
の損害を總計せは多くも十五万圓以上ならんと云へり云々　（熊本新聞）
去る二十八日の大震にて熊本市民の損害を受けし家屋墻壁の修繕及ひ市外避難の費

用よりこれが爲めに中止せし商工業の損失に至るまて取調中なりと聞きしか今或る
豪商某氏の咄に據れは毎戸平均二圓以上三圓以下なるへしと想像せり熊本市の戸數
壹万百五十六戸あれに三圓を乘して三万〇四百六十六圓となる是に商工業の中止若
くは不活潑より生する損失を積算すれは必す二拾万圓以上に昇るへし舊曆の盆會は
商業家の二大節季の一にて此必用なる時期を奪ひ居れは前推算の上に昇るも下る
ことはあらざるへし云々　（日々新聞）
熊本商工青年會にては今回の地震に就き商工業上の損害如何ならんとの取調へを爲
すへしとて八月八日集會を開き議するとありしか本縣農商課にて損害の價格取調中
彼の商工青年會へも諮問せられしにより同月十三日の例會にて協議せられし由（熊
本新聞）
迂叟曰商工青年會か農商課の諮問に付答申せられし損害の見込は世上に發表せす
後ち一二の新聞紙上に記せしより東京大坂にても往々轉載せしか爰に本縣臨時縣

會か測候所設立の議案を否決せしより熊本商工青年會は一通の意見書を本縣書記官の許迄呈進せる由にて該意見書は熊本新聞（八月二十七日發兌）に掲載あるを見れは左のごとし

七月二十八日の大地震は實に我地方の人民を震蕩し去れり一般人民殊に商工業に損害を與へたるまと實に尠からすとす我會に於ては嘗きに其筋乃諮問に應答するか爲め此損害高を取調へたるに固より概畧の取調たるに過きすと云とも夫すら尚ほ貳拾壹万四千三百拾五圓の金額を得たり是れ獨り當市内一個私人の受々たる財産の損害を積算せるものにして彼の事の公共に係るもの若くハ他の郡村に推及してこれを積算する時は其金額果して如何そや云々

今回の震災に付市中にて直接の損害を蒙りたるは藥舗洋酒店なと玻璃瓶を列らへたる店々なるか新町なる或る大藥店なとは其損害千圓以上に及ふへしとの見込なりと

（熊本新聞）

今回の震災に付浮説流言を信し人心恟恟として東西に負擔奔竄せしか其運搬費に消耗せし金高は實に莫大なるへし聞く處に據れは市内紺屋町米勝方にて費せる運搬費は凡そ四百圓餘に上りしと云（日々新聞）

市内唐人町花屋店にては避難の爲め八月三日飽田郡川尻町地方へ荷物を積みて運搬するうち中途にて番頭体にて裝ひし男ゝ走り付けもはや熊本と異變なき模樣なれは荷物は遠く送るに及はす此處にて自分か受取近く預ける所ありとて甘々と車夫を嗾ひ著して一車の積荷を奪ひ去りしと云（仝）

熊本新聞に一語の對話を記載せり該日記の畢りに臨み此對話にて大概熊本市内地震の出來ことは物括したりと思はるれば掲て以て逸事の局を結ふと爾り

此節の地震に付

●儲けたのは蠟燭屋に菓子やと車挽●損害は藥種や洋酒屋ランプや●官員の家族難を避けんとして衆人の口頭にのゝり●見識ある人動かすして鄉黨爲に安堵す●

保守主義の連中草鞋はいて一番に遁け●基督教三教會の信者は臨時救護病院の手筈を定む●熊本の人は西山の破裂を氣にかけ●西山の人は熊本の騒動を怪しむ●地震長く續きて却つて西山はやく破裂するの勝れるを罵り●夜短かくして露に濡ふものゝ疲れを慰し難し●怒濤月日をも紀せず●恐懼車の轟くにも感す●恐懼遂に熊本市移轉の話にまで及ぶ●最も多きは書生か地學の書を繙とくもの

大學教授理學博士小藤文次郎氏乃震災報告書

〔九月十二日〕〔官報〕

地震概況報告　過般熊本縣下震災に際し理科大學教授理學博士小藤文次郎は農商務省の囑托に依り地質調査のため同地方巡廻中震災に關し取調へたる概況を報告せしよと左の如し

本邦中帶の火山脈　日本の地勢たる西南より東北に連亘し變形を成して其表山面は太平洋に開き地質も地貌に準し彎曲す日本海に瀕するを內帶と稱し花崗石及太古紀地層其地盤を作し各所に火山鎔巖噴出の跡を留め外帶は太平洋に面し始原地層、中古地層、近古地層より成立す　以上述へし內帶と外帶との間に中帶あり卽ち本邦火山の大脈にして又本邦地貌の脊骨なり今其脈を追蹤するに本洲の北端恐山より起り南部諸山を經て盤梯山、那須山、淺間山に延ひ方向を西西南に轉し信飛を貫通し瀨戸內の海に達して其大部は海中に入り讃岐飯ノ山、伊豫興亘島其餘波を爲し終に九州

地に達す

硫黄灘に突出する豐後國東半嶋は則ち彼中帶の連脈にして其西に活火山由布嶽及九住山(?)阿蘇嶽に延ひ西西南の方角には肥前島原半島の温泉嶽となり尚は其西に續き支那揚子江口舟山島に達するか如し而して阿蘇火山と温泉火山の間に聳立するものは近時に至るまて地質學者の曾て耳にせざりし火吹山、熊本市の西に位する金峯山彙なり容歳理學士鈴木敏該山を實査し眞の火山なることを世に告く本官も亦同考にして金峯山彙は地質學上火吹山の實相を悉く具有するものと爲す這回大地震の起所は此金峯火山の四近なるへきまとを以下に叙述せんとす

熊本窪地の地質及地貌　豐後國の東半嶋杵築の北に一帶の山脈あり本邦最舊の巖石(片麻巖、雲母剥巖及花崗巖等)は爰に火山巖の根に露れ之と相對し南には佐賀の關陸頭東に突出す是れ始原紀(アーケアン)新部三波川層なり其間に蓮葉狀の菡萏(カンタン)の灣穿入す其灣頭には火山に縁ある別府温泉、由布嶽等あり其西に又九住山彙(?)及阿蘇嶽あり、

翻て熊本の地勢を檢するに山本郡植木及玉名郡高瀬以北にハ花崗巖其他の巖石あり杵築の北山と同一の地質を有し南方益城郡巖下及松橋以南に於ては佐賀の關四近と同しき地質なり今假に豐後杵築の北山と肥後の植木高瀬に一線を畫し又東は佐賀の關ヵ肥後の松橋に更に一線を設くれは畧ほ竝行の二線を得へくして此中間は九州を横斷する大溝なり此地質學上の横溝は地皮殊に脆弱なり故に由布嶽、九住山(?)あり阿蘇、金峯、温泉嶽等を作り九州の東瀕には菡萏(カンタン)灣の窪地を出し其西岸に於ては熊本の窪地及有明の海を生す此低地に一火山の聳立するあり即ち金峯山にして山西は一面海を成し山東は塵埃土、浮石層、火山礫、粘土、砂礫等疊々相積みて層を成し丘阜(舊熊本城は其丘岡上にあり)平原相交り熊本の平原と爲り九郡に跨り面積殆と四十八方里を占む殊に低濕の地と稱すへきは熊本以南宇土以北の平地にして川尻町其中心に位し此に緑川及白川の下流左折右曲徐々として有明の海に朝する所なり此範圍内にあるは地質上最も新地にして粘土、砂礫相積み柔軟なる地盤を構成す此地

近時はては嘗て其一部海底たりしこと尙ほ今日も口碑に存せり今回の地震深く此地に損害を與へしは其地質如何に關することを抑〻亦偶然よわらす

火吹山、金峯山　肥後國熊本市〔北緯三十二度四十八分十二秒東經百三十度四十二分二十八秒〕の西北に一群の山あり之を總稱し金峯山彙と云ふ西は遙に肥前溫泉嶽と相對し有明の海に臨み該山の大部は飽田郡に座し西北部は玉名郡に入り僅に北邊の一部は山本郡に屬し最秀點は海拔二千二百十一尺に達す此火山を構成するものは本邦に普通なる火成巖にて即ち灰白色の富士巖（アンデサイト）、凝灰巖及火山泥の三種其主なるものなり、今其構造を覘へは阿蘇山に直徑七里の外輪山（ソンムマ）あるか如く此金峯山にも亦外輪ありて稍〻楕圓形を成し長徑一里半强、短徑一里を有す其外貌へ阿蘇山に於ける如く一目瞭然たらさるも地質學上に外輪山たることを容れす然れども金峯山彙は載籍以來稍〻活潑の徵ありしも人之を知るもの稀なるを以て消火山に筭入せられ而して星霜を經るに伴れ外輪山諸所に崩壞し今は各獨立の山頭を戴くに至れり三ノ嶽、

熊野嶽、小萩、平山嶽等は即ち是なり連接せは稍〻楕圓狀を作り荒尾山其輪外に其座を占む然り而して外輪山の中央より少しく南方に偏倚し圓錐狀を作り獨り聳立するものは是れ即ち金峯山なり

外輪山中諸水相聚り一支流は字岳邊より發源し一は平山より北馳し此二支流相會する所は字巖戸巖窟の西にあり流急にして谷深し是れ地質學に所謂山口瀨（バッコ）と稱し火山の諸水外輪山の一方を切り破り外に奔出する所にて其末流は河內谷と爲り船津に沿ひて海に入る

以上は金峯火山の地質及火山に特相なる地貌あるを略記せり今該山の異動を尋ぬるに其火山質たるよと地質學上一點の疑を存すること能へす然れとも東隣の阿蘇岳、西隣の溫泉岳の如く甚た活潑ならさる故に消火山と見做し來りしも熊本市住の一老人宗村某の記憶する所に據れは文政九年即ち今を去る六十三年前金峯山鳴動する六十餘日にして止みたりと然れとも噴裂大震の之に伴隨せさるに由り世人の深く注意

せしもの歟と述へり若し之れをして實事ならしめは金峯火山は全く消火山にあらさるか如し又肥後國志略に曰く金峰山は上古一朝地震して此山湧き出つ故に朝出山又は筑紫富士の稱ありと又其北々西より位する熊野岳(別稱は九万岳、經塚、經ノ尾)の絶頂山荒れ屋々崩壞するを以て往古經を埋めり故に此名ありと云ふ本官は古史を全く信認するにはあらされとも此舊史あるを以て之を記し暫く疑を爰に存す

熊本地方外の地震　本年七月二十八日の地震は其震域極て廣濶にして九州一圓、中國の西端及四國の西部を感せしめたり鹿兒嶋に地震あり宮崎に於ては小震し大分は稍々激動にして南二十度西より東北に動搖し福岡も稍々激震なりとの電報あり殊に熊本縣に接近する筑後三潴山門兩郡は該縣中の强震部にして庇瓦を多少損し長崎も地震せり之に由りて之を觀れは這般の震地は殆と九州の全部を震動し其東南部は搖動微なりしが如し、其他山口、愛媛、高知の諸縣も熊本大地震前後に多少地震せりとの報あり又琉球宮古島に於ては七月二十七日午前十時頃東西に向ひて小震せりと

云ふ是等の詳細は中央氣象臺の報告を得て知るへきを今回の震域濶大なることは明白の事實なり

熊本に大震あるや阿蘇温泉兩活火山は忽ち人の注目する所と爲り震動の起所爰にあるへきやの疑を喚起せしも阿蘇地方は比較上輕震にして大分縣竹田と大差あるなし又其噴口も異狀を呈せす島原温泉嶽には異狀なし九十六年前噴災の際眉山(崩山)と稱する所崩壞し以後其懸崖は小震及霖雨後は往々崩るゝあとあり去月二十八日夜其一部落墜せしも温泉岳噴裂の徵と爲すべからす此地方は熊本の大震と同時に小震せしも島原よりは温泉岳弱震なり又鳴動は東北より西南に進行せりと云ふ故に阿蘇温泉の兩活火山は這般の起震所にあらさるか如し

金峰山及四近の地震　既に叙述せしは主として地貌及火山に關せしものにして去月の震災に因緣薄きか如き觀あれとも本官の私考に依れい決して其然らさるを知る是等は地震と如何なる繫累あるやは再ひ論述すする所あるべし

這般の震災は要するに金峯火山其中點を爲し該山を距る愈〻遠けれを震動愈〻輕し、假令震域内と雖も意外に劇震して損害を蒙り玉所あり即ち高橋、小嶋、川尻、熊本市なり是等い地形上山麓低濕の塲所にあると又地質の輕浮なるに由れはなり今大破の跡を追蹤するに金山彙中二箇の線を得たり、第一線は船津より河内岩戸の南を貫き平山に達し平山越の北より高橋町を經て川尻に達す即ち金峯山の西南を斜に走れり之に殆と併行する一線は野出の南部より面木、金峯山の北腹なる辰崩を經て鳥越の南なる大曲りより戸阪に下り花岡山を避けて熊本市に到達し始て平原に下れり第二線は前の第一線と金峯山を挾み其東北麓を走れり此二線今回の主なる地震線を爲し其方位に當りて地皮に斷裂所あり火山營力幾分か爲に働き古來未曾有の大災を釀せるなるべし

熊本市及近接地の地震　金峯山彙の麓に於て最も強き震動を感し大損害を蒙りしは熊本市、高橋及小嶋川尻の三町なり殊に小島、高橋は近時まて海水乃湛へし低地にして粘土、砂礫の如き粗鬆物地盤を構成するおとなれは此より一層激動を感するは理の最も覩易きものなり小嶋村及下松尾の如きは震災のために砂土噴出するおとは十六箇所、裂地五十五箇所、田圃の隆起せし者貳町五段餘陷沒せし者貳町に及ひ地面恰も小波の抑揚するの如き觀を呈するを見れは地盤の堅牢ならさるを知るに足れり」

熊本市の地震は金峯山中既に述へし如く第二裂線か鏈研谷の南大曲りを經て東々南に向ひし地下の弱點に起所あるか如し其裂線に伴ひて地震ゆしに因り南々西より北々東若くは之に反對せる方向に震動せしより家屋墓塔其他の建物は大略南或は北の方位に顚倒し家隅は南西若くは東北に位するもの毀損最も著し然して市中並に近接の地と雖も少距離に於て震動に强弱の差ありしは事實にして之と地震源動の異なるにあらす寧ろ地形及地質の如何に全く關係せしことゝ斷定す今熊本市の地貌を察するに該市は金峯山彙東々南の山麓平原にあり舊熊本城山其中央に座す其城山は原と火山泥と巖屑の交雜物にして一阜丘をなし岡西に祓川あり岡東に白川あり坪井川市

中を貫流す這般市中に於て震動及ひ損傷猛烈なりしは舊城及城南の新町、古町城東に田端城北に坪井竹部、寺原町及ひ京町なり、然り而して家屋毀損區域の播布を見るに竹部、京町の各所は低濕の地にして寺原町は元と水草拡漠繁り鴨汀ありしにより家鴨町と名けし地等あり、肥後國誌に據れは白川は小幡淵より西走し坪井川に合流せしと云へば元來竹部及坪井は地盤柔軟の川床なり而して其流は手取の古池〔有吉氏屋敷〕等今回裂地の多き下の通町及追廻田端等を經て長六橋の南に出つと云ふ古町の山崎に接する所は往古沼池にして今尚は慶德堀に其跡を存す新町は祓川に沿へる沼池にして京町及舊城は地盤脆き崖上にあり、故に以上記名の場所は川床若くは沼澤にあらされは岩崖の突頭あり然れは比較上激震せさるを得す殊に裂地の如きは曾て川床沼池に多きか如し之に反し立田山の東及白川以東は向町を除くの外稍々輕震あり古町村は稍々激震なりしと北隣の春日村は北に花岡山及万日山の堅岩屏風となりしに由り熊本四近最も輕震靜穩の地なり、字高野部田は獨鈷山南麓にあり極めて輕震ありしと云ふ斯の如く地貌と地質は感震に影響を及ぼすこと決して些少ならす

左に掲くるは七月廿八日初震以來縣廳に於て記錄せし震動表なり事務繁雜の際小震、微動、小鳴動の如きは或は遺漏せしものあらん又驗震器上の記錄に非されは原より精確なるや否は保證せす

震動表畧す

肥後地震區域　本年七月廿八日の大震は肥後一圓を搖りたるのみならす九州全體に震動を感せしも要するに大震區は其範圍狹隘にして肥後國中僅に三十四方里に限るか如し而して飽田託麻の兩郡は殆と全郡其域に入り損害の最大なる部に屬し玉名、山本之に次き上益城及合志の諸郡は小部分に止り菊池及下益城兩郡は僅に其一端大震區に加れり

震災の播布を撿するに潰家、疵傷、裂地、道路山林堤防の崩壞等は金峯山彙山麓の四

周に最も損害深ふして之を遠さかるに從ひ輕減するおとは熊本縣の精査に據れは明瞭なり然して金峯山彙中の諸部落は比較上山麓より大損害を蒙らさりしは蓋し四周低地の地盤より山嶽を構成する巖石は堅硬なるに源因するか如し又特に激動を感せし地より僅に隔たるも大に輕震せし所おり例せは白貫石及山本郡の菱形村にて大震區範圍内の靜穩地なりと稱すへし之れ地皮裂縫の道に衝らさるのみならず背後に山あり其震動を遮斷せしに由りしなるへし山下に最も激震せしは金峰山彙の南、東南及東なり之れ該山彙は東南に地勢開き又前面に廣き低濕の平原を臨み堅硬の金峯山彙軟き平地に接する所は最も激烈を極め小嶋、高橋、熊本市は不幸にも其位置に當り古來未曾有の震災に遭遇し幾多の家屋を倒され廿九人の死傷を出す此慘憺たる景況は實に名狀すへからず被害の狀況は別に統計表を揭け玄を以て宜しく參考あるへし」

大震前後沿海の狀態　金峰山彙は西面に於て肥前嶋原と相對し有明の海に臨み其海は大震區の一部分と推察さるれは其狀況を知るおと緊要なり今熊本縣下警察官の報道に據れは玉名郡即ち筑後に境する沿岸は去月二十八日大震の際鳴動南方より來り北に進み出漁者は金峯山の方に鳴動するの後船底に材木の觸れたるか如き感覺ありと云へり鍋村の漁者は沖合に於て漁業中其際海底より非常の「デンモク」即ち海水の海面に膨脹迸出を來し一時は漁舟も轉覆すへき虞あり暫時にして海水の狀態平常に復するや否や三ノ岳（金峯山の北にあり）方角に位し砲聲の如き一響を聞けり大震後は潮量多くして又激流し沿岸接近の海は不漁なれとも沖合は常日の如しと云へり

飽田郡の海濱は岩崖にて金峯山彙の西腰海に臨む所にあり其際出漁者は小震に過ひ鳴動多きは東南若くは南より來りしと云ふ其後海面に於て格別の異狀を見さるも一切漁獲なし宇土郡の北岸は去月の地殃を感する頗る溺くしして例年に比し雜漁稍〻減したるも沖合に於ては更に常日と異ることなし

出漁者の報告中に這般震災の時肥前嶋原温泉嶽非常に鳴動せしと述へし者あれとも

之れ常日該山を恐怖するの心を起りしものなるか如し長崎縣の報知に據れば眉山に小崩ありしも温泉嶽は常狀なるを以て見るも明なり之を要するに今回の大震は海水に特別の異狀を釀さゝるより推考すれは劇震は陸上に起りしか如し

金峯山彙及四近今回の地震特相　地質學者は地震を三類に分ち(甲)は陷落地震と稱し地下循環の水岩石を溶解し去り地下に空所を作りしため上部の岩石支柱を失ひ陷落の際地盤を震搖せしむ此種の地震は石灰、石膏山等を除くの外は概ね稀にして(乙)は地辷(ズリ)地震なり此類は本邦地震の大數を占め其原因たる地皮に大割隙(ひび)あり其線に伴ふて側層隆起し若くは辷降するに先に地盤を震動す九州に於ては瀬戸内より天草洋に向て全島を横截する此弱線あり殆と横溝の如き狀を呈するは既に前條に於て述へり、他に猶ゆ琉球列島の西北島より開聞、櫻島等を經て北馳する地割線あるか如き觀あるを本官は確然何れに在りと眞に証明すること能はさるを舊紀地層の播布より推考すれは熊本、大分兩縣下に地層の非常に錯雜するを見れは南北に走る地皮

弱線の存するか如し然れは一は九州を東々北より西々南に亘る弱線と一は南北に横はるか如き觀ある弱線と相交斷する所は九州の中部近き所なれは地辷(ズリ)地震のなきを保せす(丙)は其弱點より地下の熱氣を泄し幾多の火山を作り火山動力作用の結果として地震するを火山地震といふ然れは(乙)地辷地震と(丙)火山地震との關繫甚た密着にして時と場所に據り火山働作は地辷を促し地辷又火山をして活潑ならしむるとある故に孰か地災の起因たるやは容易に判斷し難き場合あり

今回の地震强弱に大差あるもこを要するに其區域廣濶にして地辷地震たるの感覺を與へ、加之强震域は地質上豊肥横溝帶に存するかために一層其考に傾かしむるも親しく熊本地方に來り經驗するに這般の震動は東京地方に普通なるものと大に異なり突然雷の如き鳴響あるや金峯山地方には直に上下動を起し俗に言ふ搖り返しは殆となきの如し又鳴動なくして急に起り急に熄み震動時間特に短し、驗震器の補助なくんは震動の方位を求むること極て困難なり今回は比較上裂地多くして又倒家崩崖著

し熊本城址の如き加藤氏築城爾來曾て震災を蒙りたことなきも本年は大に崩潰し現今師團の建物及石垣等に大凡十四万圓餘の損害を與へりといふ

七月二十八日以來の鳴動及地震は其起所何處なるや此問題は被震地の人民のみならず學者の着目する燒點なり然れとも熊本に測候所の設なきを以て大地震前後氣象の狀況を知るを得さるのみならす又此際必須なる驗震器を缺くを以て研究のために全く器械の補助を仰くを得す只破損の多少を察し家屋墓塔の顚倒方位を考へ石垣崩壞の方角を視、鳴動の來りし方位を尋ね地質構造を檢し、統計上の觀察に據りて得たる結果に就き意見を述ふるのみ地震に關し精密の器械上觀測は理科大學教授關谷清景當時滯熊實驗中なれは別に報告する所あるへし

金峯山彙は火山なり火山中の新火山は圓錐狀なる金峰山なり嘗て其活潑なりしはと明晰にして其形狀の猶ほ完全なるを見れは地質學上左程時代を經たるものにあらす然れとも載籍以來噴裂活動ありしを聞かされとも多少震動せし痕跡あり然れは消滅

火山にあらて睡眠火山に屬すへきものなり熟々火山史を案するに睡眠火山忽ち活火山と成り活山は又眠山と成るあり其變幻極なきそのなれは眠れる金峯火山彙再ひ活動せさるやは保證し能はされとも小天、船津の温泉は大震の際僅に混淆せし(山下の平井戸は皆多く地震後に濁色を帶ふ)のみにして別に異狀なし未た他に新湧の温泉を知らす、水蒸氣の噴出するあるを實見せさる以上は目下此地方稍々活潑なりと稱するに足らされとも山麓を顧れは金峯山彙の四周に限り殊に震害を受け深く慘狀の痕を印するより想像すれは金峯山彙中に地下不穩の源を存するか如し

又四圍の村落に於て鳴動乃來りし方角を尋ぬるに多少人に依りて差あるも南麓の住人は鳴動北にありと言ひ東にあるものは西と言ひ北麓にあれは南に響き西方は有明の海に瀕する所にして鳴響は南よりすると言ふ者あり或は西南と言ふあれとも此地より南方に位する宇土郡、又西南位なる天草郡に於ては激震の發現せし報に未た接せされは音の反響に由り地鳴を南若くは西南より聞きしなるへし之を要するに鳴動

の起所は金峯山彙中に存在するか如き

各地被害の狀況　震災に罹りし各郡の潰家、疵傷、裂地、道路、山林、耕宅地、堤防の崩壞、橋梁の損破、井水の增、減濁は既に熊本縣廳の精査報告あり今左に市郡別の表を掲く（震災被害一覽表は別紙にあり）

別表に被害の大要を示せし如く熊本市は深く其害を蒙り家屋の倒破すること四十八、人の疵傷するあと八、道路の少破、家屋の損所到る所多少其跡を存し殊に市の北部は南方に比し家屋多く倒れ地災一層劇烈なりしは是れ元來其地の川床なりしと震動の舊川床に直角を爲せしと又第三に此北部の各町は明治十年の兵燹を免れし古家屋にて動搖に堪へざりし等其原因なるべし」高橋は熊本市の西南に在る一小町にして地災に最大の害を受け建物及器具は多く北四十度西に傾覆し倒家四十六、疵傷十五人に及ひ實に慘狀を極めり」小島町は高橋の西にあり其四近多少の災を被り二十一の倒家あり四人の疵傷を生す」川尻は山麓より稍々離るゝも意外の大害を受け十五

の全倒家と十八人の疵傷あり」金峯山彙中の芳野村には倒家三十六あり裂地百五十箇所の多きに至るも幸に輕傷者一人に止れり」山麓北部は要するに害薄きも震動の範圍廣く延て關町に至り筑後の地震區に繼續連亘するそのなり

熊本市の大震摸樣及其後の景況　明治二十二年七月二十八日午后十一時四十分頃（各所の報知は三十五分より四十九分の間にあり今最多數の四十分に據る）遽然地大に震ふ是より先き連霖三十餘日に渉り殊に七月二十三日以降の暴雨は終に球磨川、綠川其他の諸川河を漲溢せしめ縣內葦北、天草の二郡を除き一市十三郡は皆多少の水災に罹り農作物損害の如きは轉た酸鼻に堪へざらしむ而して熊本市內北部瀨戸坂の如きは二十三日崖落ちて八人を殺し八戸を損せり越て三日密雲漸く散し二十七日に至り全く晴天を仰くを得たり二十八日も亦晴天なれとも夜に入り微雲處々に散點し風位は南にして溫度は華氏八十二度內外に昇降せり

市街各戸半既に寢に就きしも街上は尙は履聲車響の未た全く絕へさる十一時四十分

頃轟々として雷聲の如き響あるや否や俄然激動（主として上下動の如し）を始め其勢甚た暴烈爲に墻摧け瓦石飛ひ石垣崩を橋梁破損し地盤割裂して土砂を吹き同時に水を噴出し全半の倒家四十八に達し人の疵傷すること八人瞬間にして慘憺たる現狀を呈出す或人曰く實に前代未聞にして嘉永七年十一月五日午后五時の大地震に勝り且つ今回の地動は甚た急迫且つ激烈にして震時短し彼の嘉永震動の緩序あるものと大に異なる特相ありと

初震後凡そ四五分間毎に數十回の微動あり翌二十九日午前一時半頃稍〻強く搖り午前三時頃亦強震せり此時天氣は前夜の蒸氣に反し晴快となりしも未た震動全く止まざれは全市の人心恟々として家居を安せす大數は夜を徹して屋外に露臥し同二十九日は商家は店を閉ち全市危憂の念を抱き安堵せざりしといふ

本官八月一日午後八時着熊せし際も猶ほ市中三々五々街上に一時小屋を設け幕を張り露泊するを目擊す然るに八月三日午前二時十八分大震す其激度は初度の三分の一に該當すべしと雖も驗震器上の報告にあちざれは固より信を置くに足らす第二回の大震には倒家等の少きも更に幾多の新裂地を生せり自ら其際市中を巡回せしに市民狼狽し西奔東走其狀恰も戰爭の如し同三日は時々輕震するを以て此際流言百出爲に市中人心穩ならす老若男女は相先ちて家財を携へ多く南方に走り同六日に至り始て市中稍〻靜穩となるも猶は其後四五日間は徹夜皆屋外に露泊し以て警戒せ

今回の地震源因及起所　既に叙述せし如く九州殆と東西に横斷する地皮弱線の存するとは疑ふへくもあらす又南北に九州を走る疑しき線もあり彼の東西に走れる弱線に伴ひて地下の熱氣泄れ幾多の火山を勃興せしむ豐後の由布嶽、肥後の阿蘇嶽、肥前の温泉嶽等卽是なり、然り而して假に阿蘇嶽と温泉嶽に一線を畫せは殆と同距離にして一の火山ゐり其位置と其名を問はゝ熊本市の西なる金峯山彙なり人の普く知る如く南米の西岸は火山に富ミ其火山は地皮の弱線に併列して火山の働力常に座を移し其薄弱線に沿ひて變幻出沒極なしと云九州に弱線あり又火山あり温泉、阿蘇、由

布の諸嶽一列し金峯山も其列中に加入しあれは地質學者何ぞ其活動せざるを保せんや況や今回の大地震は金峯山彙及其麓四圍の低地に於て特に劇烈なりしに於てをや」過日以來金峯山彙を實踐するに裂地破損の痕を所々に深く印し其裂地の方位を求むるに二線を得たり(又他に割裂線なきを保せす)其一は船津より高橋町に走り二は野出ヶ池の上、戸坂に達す此二線金峯山頂を挾んで東南より西北に向ふ故に震動は殆ど南北若くは西南東、北に搖り器物亦殆ど南北に倒るゝを多數とす斯く金峯山彙中地皮に割裂線あり地盤辷りて其兩側昇降せしも量られを又這般の地震前雷の如き音響を發するは火山活動に類似して陷落地震に往々其音聲あるを概ねて地辷地震に罕なれは幾分か火山性の地震たりしが如し故に當地の地震は未だ深く研究を經されとも地皮の地辷と火山の働營力孰の其起因たりしやは判斷し能はさるとも多少火山働力の發現せしが如き感あり其起所は金峯山中地下深き所ならんか左れは這般の震動區域は常に比し廣濶なるが如し尙は詳細の研究結果は他日を待ちて更に報道する所あらんとす

理學士金田楢太郎氏乃地震調査報告

本縣下地震調査の爲め內務省より出張を命せられたる理學士金田楢太郎氏は八月十五日着熊爾來數日間西山地方の實査を遂けられし後地質調査として宮崎縣へ出張され同縣に於て當地西山の摸樣等詳細取調ありし報告書を寄送せられしを海西日報に掲載せり今爰に轉載して小藤博士報告書の參考とす

熊本地震調査報告書

金田楢太郎

熊本城下を震動せし大地震の中心は西山山彙中二の岳直下地中深き處なるは一點の疑ひを容るへきに非す其理如何となれは(第一)震搖茲に最も烈しく(第二)地震他所に先ちて茲に始まり(第三)震動の際此地の家屋幷器物震搖(swing)せすして皆上下に昇降し明らかに其地震搖の縱動にして其地震心直上なるをを證し(第四)震動の急に始まり

急に終りしこと等の事實により其震央(epicentrum)たるあと現然明晳たれはなり、今回地震震動の二の嶽近傍に激烈にして其の破壞力の廣大なりしあとは著るしきものにして堅硬なる巖石地盤の崩壞したるなり（例へは西山々彙中花園村西字馬の路と稱する畑地近傍の懸崖幷に船津百貫石間海瀕の絶壁に著るゝ）又重量數万斤なる大盤石の一旦飛揚して居を遷したるあり（例へは野出村本村の西に俗に太皷石と稱する大巖の座を南方に轉する九寸米に及ふものあり）大地の裂け罅はれたるあり（例へは野出村字馬の鼠に在ては裂罅幅二尺に超へ長さ四百間に及ひ其中點より數條に分かる其に幅一尺より三尺なるものあり）其の破壞力の廣大無遍なるは實に驚くに餘あり而して西山地方の意外に平穏にして人心の動搖せさりしは一は其の棲住士人の膽力熊本人士のあとく小ならすして勇壯磊落些事に頓着せさるに因るへしとゝ雖とも其主要なる原因は（第一）其の地盤をなす處の巖石の强硬にして破壞結果の外觀觀察には廣大ならさるとと見もるゝと（第二）直接に震害を蒙るへき家居人畜の鮮きこと（第三）間接に地震の爲め崩崖倒屋を生ゝ災害を受くへきもの〻稀れなるゝと等にして尙は重大なるは震蕩力の激烈なるも地盤巖石の質緻に性硬なるを以て充分に巖石微粒を震蕩し自在に絶壁家屋を動搖せしめ得さりしに因らすんはあらす

蓋し今回地震の區域は廣濶にして震動の强弱また等しからす就中熊本城内の如きは震蕩最も激烈にして震心の天守臺下に在るかことき感を懷くもの（第六師團經理部員の如き）勘からすと雖も前已に論せしあとく震心の西山々彙中二の岳直下に存することは異質地盤の地は暫く措きて同一巖石（富士岩幷同熔岩魂集岩）より成る西山々彙中に就て研窮すれは二の嶽に最も激しく震蕩し此を去ることの遠きに從ひ漸次震蕩の靜穏となり破壞力の減せるを以て知るへきなり

元來地震理學は近世の創立に係り未た研究を經さるの事項多く隨ふて地震伴隨諸現象の說明を獲るもの鮮し故に千事万象を說明講演せんには必す諸科理學の補介を仰き父老の實驗を經たる者の言を採り親から獲たる事實に據り普通觀念(common sence)に照

らし自説を付するを要す、今左に説く處のそのは余か親から天然の諸現象に背馳する處なしとし余の觀念に咎むる處なき道に據りて下したる自説にして其或ひは道理に違ひ既獲學理に背くあらん歟先つ之れを文に草して公白す江湖の博識先達秘説を開き豎兒に教ゆる處あらは幸孔、余今回熊本四近西山地方を巡廻し（官用は專ら地質調査にあれ共）今般地震被害の遺跡を見て謂へらく今般の熊本の地震は其實際震域の廣濶なるに關せす其震被の直正進路（固有震域）は意外に狹隘にして紐帶のごときそのにして其の實際震域の廣濶なるは地盤の伸縮生（elasticity）に基ける震波の反射及ひ屈曲等に依り直正固有なる狹帶より延ひて廣大なる面積を占領するに至りしそのに非さる歟否」今西山々彙に就きて崩塘破屋或ひは盤巖飛轉のとき震蕩力の猛烈なりしとを指示する諸點殘探索し地圖を繙き其諸點を印記結付するに二の嶽近傍に相結縺すは二線を獲たり、謂ふに斯の二線は地震々波進路帶の存在を明示するそのにして今般地震々波の帶狀に進行搖蕩せしとを示すそのに非さるなき歟否

此は他の地震に關しては余の謂ふ處に非すして專ら今回熊本の地震にのみ關する余の考説と看做されんとを望む

右二線の一は西船津より河内谿に沿ひ二の嶽を衝き平山越を經て辰崩より戸坂に至り花岡山の北東麓を通り熊本城内より西西北、東東南に向ふ而して第二線は野出より面の木を經て二の嶽直下に第一線と相結縺し尚ほ北北西、南南東に向ひ高橋を過きて川尻に及ふ

如斯今般の大地震（主として七月廿八日の地震）震波の固有進路に二線ありて其の結縺する點は即ち今回地震の震心（centre）直項にして二の嶽の震央（epicentrum）たるは疑ひ容るへきに非す、但し其の地震蕩の意外に弱く災害の非常に尠きは前記の理に基りくと雖もまた同地方人民不幸中の幸福と謂りへし

小藤博士か今般地震調査の爲め來熊ありし翌日即ち八月二日地震に付き注意す

へき件々を手記して熊本新聞に投寄せられ同新聞は即日附錄として市内人民へ報道せしものなり今爰に採錄す

漁業者に注意を望む　総へて下等動物は地震其他に感し易きものゝして其然る由縁は直立せる人類と違ひ多々は横行横臥するのゝならす大地の地盤に直ちに觸れ居るの通常なれは地下に小異變ある毎に人類に先ち之れを感し五官も鋭敏なるにより吾人よりも物を認知すること速なり、故に地震其他地變あるに際し下等の動物は異常を呈するを普通の例とす或る年ロンドン城貫流するテームス河に幾万となく死したる魚類漂流し傍人其の何たるを知らさりしに瞬間にして大地震ありしと云ふ其の死を來たせし源因は未た判然せされとも地下に幾多の小孔あるあり亞硫酸若しくは其他有害物を出せしに依り之れに中毒せしものなるとの説もあり或ひは水に異常の劇しき動揺を生したるに因り空氣動物なる吾人に空氣の激動即ち大風の死を釀すあとく水の異動其の原因ありと云ふ兎に角地震前には河海に於て斯のことき例あると屢次なり、又海水の狀態に付き他に見るへき理由なくして潮水遠く退きて干潮となる時必す海中地震の徵候にして干潮の反動は驚くへき津波來襲すへし故に遠く海岸を去るか若くは山に登り避害の用意專一なり

地震の前徵　これを知ること最も重要なるとゝて尊き生命と財産も全く瞬時間の地妖により皆無となるへし然れとも今日迄學者其方法を研究して未た其結果を得す、月の盈缺も多少關係ありといふもあれと或ひは地雷氣に非常の働らきありといひ、極大地震には電信線全く其用を爲さゝること通常なり、當熊本市には去る二十八日の大震ありし其節は如何ありしや、又當時柄其當地電信局技師方はこれに注意し市民罹災の一部分にても助けられんことを切に希望に堪へす、當地には緊要なる天象測候所の設けなきは遺感極りなき次第なり故に地震の性質を詳かに知るに由なく又空氣の壓力淡濃も不明なり勿論氣壓の變動は地震の源因若くは結果に關係あるやは確然明言し難きも宜しく參考すへき事件なり又た其模樣に依ては地震の前徵と爲すへきものあり、前

項に掲げしごとく大地震前には下等動物に常ならざる行狀あり、意太利の大地震前には驢馬狂ひ躍り馬嘶き飛奔することあり、雞子鳴き驚きたる狀を呈し、虻鼠幾万となゝ路上に横ふることあり、猫などの業作なとは最も常に注意すへし其變を察し虻を免れしその古來其例尠からす、犬狗其他家畜家禽の有樣を能く視察し避害の準備を爲さゝ大に僥倖を得るあとなしとせす、以上列記せし地震前徵は素より學術上得たる結果にあらされとも悉く前徵、徵兆となすに足らされとゝ吾人はこれを措て他に徵候と爲すへきものを知らす當今地下不穩の際は宜しく注意すへき事項と思考せり

左の一節は理學士金田楢太郎氏が熊本新聞に寄せられしものにて九月二十九日の同紙上に記載せゝ所ろなり震災に遭ふて地震の學理を研究するは其の得る處ろ甚だ切なるべきを信す故に其のまゝ茲に之れを轉載す

理學士　金田楢太郎

自者地質學書拔萃

地震とは大地の震動にして其の震動の起心は地下僅々一里半内外の點にあり

大地の震動する方法に三種あり

第一　衝突震動

第二　波狀震動

第三　廻轉震動

(一)　衝突震動とは地震起心近傍に在て感する處にして土地上下に震ひ物品亦揚降す、

(二)　波狀震動は地震起心を去る較々遠き處に在て感するものにして家屋の類皆前後左右に搖蕩そ

(三)　廻轉震動とは二三震動の相交雜して生するものに係り石碑の類是れが爲めに螺旋狀に廻轉するもの多し

地震の作用に强弱ありて强震は全て稀有なれども大なるは安政年間の震災の如く江戸全市を破壞し、千七百五十五年西班牙のノリッボン府の地震の如く數万の人口を滅亡

することあり

大地震動する時は通例雷電の如き轟聲を發し、又土砂の地中より涌き出て井水の乾涸することあり

地震の震動時間は甚た短きものなれとも其の震動の相續きて起り、數月に瀰りて止まざること屢々なり、地震々波の進行速力の元より動力の強弱に依ると雖とも、其の進行經過する土地堅硬に關すること大なり、例へは同じ東京市中にても下町(淺草、下谷、神田、深川京橋、本所、日本橋、下谷の諸區の低地)は震動を感すること甚だしきも山手(麹町、赤阪、麻布、四谷本郷區等土地高く地質堅實なる所)は之を感するまと至りて微なりと云ふ、又相模江の島の南端に地震不知と稱する地あり、蓋し其の地盤を構出する岩石の較〻硬くして地震を感するまと少きに依る、陸地に在ては地震〻波進行速力は平均一分間に四乃至五地理里にして海中に在ては三十乃至四十海里なりと云ふ、又地震の起心の深さは一定せすと雖も通常地下一乃至一里半(日本里)に過きす

海震又海嘯は海底の地震又陸下の地震に基づき海水の搖動する者にして其の遠因は地震と同じ地震の原因に依り之を大別すれは三種あり

第一、地皮摺折し、地層斷下するに依り起る土地の震動にして之を斷層地震と云ひ

第二、土地自重の爲めに陷沒するの際生する土地の震動にして之を陷沒地震と云ひ

第三、噴火山迸發の際、四近の土地震動す、之を火山地震と云ふ

之を要するに火山井に陷沒地震は其の震域は僅かに活動火山の近傍に限り、地震の尤も區域廣きものは斷層地震なりとす

本邦に在りては地震は多く南北若くは北東より南西に廻轉す、蓋し地震軸は本邦主要山脈の方向と全しく南北なれとも地皮の彈性あるか故に餘動の方向を綫じて東西の地震を生す

本邦中地震の尤も屢々なる處ろは東京四隣安房、上總、陸前北上川地方なり

熊本明治震災日記附錄畢

金田理學士著地質學書抜萃

明治二十二年十月四日刷成
明治二十二年十月廿四日出版

著作者兼發行人　水島貫之　熊本縣熊本市北新坪井町二百拾四番地

印刷者　水島忠新　熊本縣熊本市古城堀端町百拾四番地

發行所　活版舍　熊本縣熊本市古城堀端町百拾四番地

大販賣所　樂善堂　長崎次郎　熊本縣熊本市新町二丁目

定價金

74318

17
264

026198-000-7

17-264

熊本明治震災日記

水島　貫之／著

M22
ADC-3884